

【目的】高齢社会の到来によって医療提供体制が見直されているが、薬剤師も医薬品の供給を通して、新たな責務が求められている。特に、癌治療の分野では、積極的な治療から緩和医療に至るまで、専門的な医療提供体制が求められ、薬剤師も患者さんの死に向き合う機会が増えつつある。一方、薬学教育6年制は、今後の医療提供体制を視野に入れた教育を行うことが不可欠であり、薬剤師業務との整合性を検討する必要がある。今後、緩和医療が推進されるなかで、薬剤師も臨床の死に直面する機会が増えることが想定される。今回、薬学教育モデル・コアカリキュラム（以下、コアカリ）にある〔A 全学年を通じて：ヒューマニズムについて学ぶ〕の演習を通して、「いのち」、「生命倫理」、「緩和医療」、「臨床の死」などについて具体的なカリキュラムを検討したので報告する。

【方法】1)コアカリの中から、上記内容に該当する部分を抽出し、カリキュラム配置を検討した。2)薬剤師から業務上の「患者さんの死」についてヒアリングを行った。3)医学部、看護学部のカリキュラムとコアカリの比較を行った。

【結果】コアカリからは「いのち」、「臨床の死」等のイメージは乏しいが、各大学のカリキュラム作成の段階で具体化する必要が感じられた。また、医学、看護学部と比較すると、薬学生の事前実習、及び実務実習では、患者さんよりは薬物治療における薬に中心を置いているのが特徴的であった。

【考察】演習を通して、学生の「いのち」について考える機会が少なかったことから、1年次から6年次にわたって、学生の成長に合わせたカリキュラムが必要である。コアカリ A-3 の演習を通して分かったことは、薬学教育では「いのち」の教育を確立し、その先に「臨床の死」を配置するのが望ましい。